



詞林典故 下



服部文庫
イ17
461
2



117
461
2

詞八衢下卷



下二段活	中二段活	四段の活
撫 <small>カ</small> 捨 <small>ス</small>	閉 <small>ト</small> 落 <small>オ</small>	待 <small>マ</small> 打 <small>ウ</small>
(7)	(ち)	(た)
まむぬ <small>カ</small>	まむぬ <small>ト</small>	まむぬ <small>マ</small>
1る <small>カ</small> 多 <small>カ</small>	1る <small>ト</small> 多 <small>ト</small>	1る <small>マ</small> 多 <small>マ</small>
(フ)	(フ)	(フ)
まむ <small>カ</small> き <small>カ</small>	まむ <small>ト</small> き <small>ト</small>	まむ <small>マ</small> き <small>マ</small>
(3)テ	(3)テ	
よ <small>カ</small> ま <small>カ</small> か <small>カ</small>	よ <small>ト</small> ま <small>ト</small> か <small>ト</small>	よ <small>マ</small> ま <small>マ</small> か <small>マ</small>
(5)	(5)	(7)
よ <small>カ</small> ま <small>カ</small>	よ <small>ト</small> ま <small>ト</small>	よ <small>マ</small> ま <small>マ</small>

多行之圖 並受りてんまの象

○このりよハ一段の活相也

やちまて下

四段の活詞

あう	あやま	う	う
か	か	く	け
こ	こ	そ	た
た	た	た	た
ひ	ひ	ま	ま
ひ	ま	わ	ま

○いつ古今集友わづらうをのらうとわあひ山六帖友
 袖ひ所もなほ反撰集悉ふそをばらうしう金葉集まに代
 ふひつ松のまかどあうきんけいこまをけり乃中二段も依て

お卯言あをこれ例あ不こ後うきあり

○みつ古今集に志不こぞ入ゆる殿の後撰集に収こ
 め海くまけをや拾遺集系小志ほこるやどにひよこら
 お後拾遺集をに初こはよう所が物指藤原君のまをよ孫
 ひこ下やかと云い又吹上巻よ秋こ受こて云こまこ同巻の
 新よ志やれこらるれ源氏物語真本相よむひよこらこ他
 て云こ丹後中為忠家百首に盛忠いうまればこあこよひの
 月歌の云こなご程いこまこけくわくおやくあきたきこの相
 中二段ふこちこらこらるこ程こまこ程こまこ程こまこ
 よ志う活きたるこらこらあこら皆右のここらこらこら

○やちきく下

小のむきばかりまゝに寛き女侍人内屏内よきあへせ家流いゝゑ
 まるるたるの乃きあへ水まらしくおるまあき世のうげをえはれ
 とあるまるるハミマキおるてまゝとありいとゆる自然のわの
 ちありうくくとはまきまど

中二段の活詞

このつるを倍云ふちるやうに例じ

いさつる ねつる くらつる
 まごづる ぞやづる とづる まづる
 ひつる ともづる よづる まつる

○いまるる 古事記上卷小啼伊佐知伎云々又下ナキイサチル哭伊佐知流

やありこハいさつるをせつるまき例あればせまらることつして
 ハ俗まの例あり続日本紀宣命アラ荒備流ヒとつれや俗まの
 例なりこめおやくつるる例なり

○まごづる 日本紀孝徳卷にシコナ諧倉山田大臣於皇太子曰云々
シコナ 続日本紀宣命小譏治まをりゆつるまに字鏡よ諧譏也志
シコナ 已豆とありまをかくちづよのこありてかのまをりまをりまをり
シコナ づの詞のまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり
シコナ 濁音一もなくこめはてしたあを濁まれかまをりまをり
 ○まほづる 堀川百首集よ被まをりぬ拾遺集志小まをり
 ○ひはる 拾遺集志小まをりかめつるまをりひらぬ山川の順集

○やちまきまど

上杉やうてくばうしゆでひつるたしゆの急轉日記に袖ひつる付
 とすふこそなごきし源氏徳角おかく袖ひつるふど堀川二
 郎お袖ひつるやこの河原あをさうらなくおなうさなり
 ○もみづる萬葉十小山の將黃變古今集をほひしももも
 ねを思えけき新古今冬よこめくればゆふもみぢておとねあり
 ○をひつる出雲国造神賀詞彌乎知尔御表知坐云々万葉
 集十七はたなごきも乎知母の御とき同井よゆめおちらけ那
 也乎知よまけまはのあよ歌云をちかぬうなぞつるを
 こねありけくかくのこあまてつつるつとつるこはあま
 ざもどもこのもたごきなるべし

下二段の活詞

ひつるを俗言よはてるるといふ例なり

あつれ 。あわつれ いづれ 。うづれ
 かなづれ くらづれ まづれ せづれ
 たづれ なづれ ひづれ こづれ
 まうづれ ゆづれ

- あまつる字鏡小惶急阿和豆やありけりといつるハ多ク
- うづる古事記上巻にぬぎ宇豆又棄をうづるヤとある事
- ゆづる字鏡小煤以菜入湯云々奈由豆とあり又菜花物種
- 古事記上巻にこまづるをまゝ古今集春よまゝをけ道ゆ

○やちまくと

三つにやほほ。大依日記ふ手をひて。さきほを去
 らぬまゝのほほ川神をひて。やま。丈木集よ野川の水を
 枝ひて。その外。そ。な。の。つ。あ。で。は。ま。で。せ。つ。て。う。つ。て
 ひくまひ。み。は。う。つ。せ。を。約。え。く。つ。た。の。こ。う。あ
 け。は。る。は。ま。な。と。う。つ。あ。げ。た。あ。け。た。き。こ。あ。は
 け。う。げ。た。り。こ。は。と。上。あ。も。つ。て。の。う。ち。み。て。八。家。隆。の
 舞。ふ。う。え。な。れ。の。の。乃。さ。な。な。え。あ。げ。こ。つ。る。を。あ。ま。は
 こ。の。活。詞。も。あ。も。る。ね。ぞ。ね。は。八。家。隆。の。う。つ。て。

奈
 多
 行
 之
 圖
 並
 受
 了
 二
 の
 系

下二段活	一段の活	変格活
兼カニル 束カニル	似ニル 煮ニル	往イニル 死ニル
②	①	④
かむぬ ぬむ	かむぬ ぬむ	かむぬ ぬむ
③	⑤	⑥
はる むる	はる むる	はる むる
⑦	⑧	⑨
か け	か け	か け
⑩	⑪	⑫
か け	か け	か け

○けり小四段の活中二段の活なり

○やちきうこ下

○五

○夏格の活詞ハ冬の上立に立せる往死乃何うろのさかの信
 ぎゆハ大匠四段乃てきのぐやくよて切るせばぐまの何
 ニッウるをアその信ハニッあり下知の何ハ社とフカタウリ

一段の活詞

小ハ 煮
 似 小ハ

下二段の活詞

はめるを俗言ハ社るコトハ何あり

かぬる	かさぬる	かゝぬる	たがぬる
たぬる	たがぬる	けうぬる	けがぬる

けうぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

いぬる けいぬる

- かぬる 万葉十八ヤ〜ウ乃許登可多カ祢ネ〜あり
- たがぬる 万葉五ナ〜ルに多何祢提カとヨあり
- たぬる 万葉十五ニ〜ク道ノなガくをらリ多カ多カ祢ネ
- つがぬる 階拾日記ハのウぢヒきツ〜ク〜あり
- そめる 古事記下巻に須岐婆奴流母能ス〜キ〜フ〜シ〜トあり
- ふさぬる 日本紀用明卷ニ摠撰万機ヲ〜ト〜シ〜ク〜あり

○やちきと下

四段の活詞

あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
あが									
あき									
あた									
あふ									
あへ									
あふ									
あふ									
あふ									
あふ									

う	う	う	う	う	う	う	う	う	う
うが									
うま									
うた									
うた									
うた									
うた									
うた									
うた									
うた									

○やちきん

○

をぞあり

○いさよふ大和もほたりたひさめふたり 唐窪の切たり
いづつひくちをり

○うもふ古事記上巻に宇氣布と記ふ伊勢もわたり
に記してつた人とうけへをあらあ

○うけふふ 萬葉十八の抄あり宇豆奈比 続日本紀宣
命に相宇豆奈比奉 奉りたはあま

○うけふ 拾遺集にふいよき中丹後守為忠家百
首小忠盛らけのあ階を乃うらひめらぬ中あり

○かぶ 万葉九に加賀布耀歌とあり

○かこふ 全葉集雑小かこふ垣果の好忠集かこふ
のまぐき 垣門百を雑かこふいわふ柴代唐丹後守為忠家
百首に伸正かこふくさけのあまのさぞをあらあり

○かこふ 古事記中巻に掠取其母王 続日本紀宣命小高
脚坐次乎加藤 毘 奪りく皇位乎掠 天ふどあり 中日本紀
繼體巻に掠とつとひとをうり

○かぶ 万葉十八の抄に加多波牟の 後撰集春に山
乃乃苑の香かぶぬりやハエにあらあり

○くさふ 万葉四に久流比小久流比に記ふ
○ころぶ 日本紀神代巻に發稜威之噴議又神武巻に誦噴

○やちまうと下

○あつがふ 係氏中川寒よ見えあつがふ まゝ 徳角卷
よ見えあつがふ なぞあを

○たよ 續日本紀宣命に多婆受中雨のまゝ 後小なび
なりあつがふ なびたを音便よつるあり

○たよ 万葉十九よ多久波比おきるとあをえんお活
きたらこを口えぎ後ぞ中二辰乃活うかよけぞあをえん

どくれをきれまに似たれを先あふお勢祭又おま
ふの日常お用下辰乃活をまおまおまおまおま

たよ 二つおまおまを第二の音にけしおまおまおま
てうまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまをけしおまおまおまおまおまおまおま
活乃うまおまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおまおまおま
のまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

○たよ 忠集にふつたつたつたつたつたつたつた
おまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

○たよ 日本紀哥よ山の金れくぬあゆえん人涅羅賦馬の
おまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

○たよ 後撰集春よおまおまおまおまおまおまおま
おまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

○やちきと下

もろゝひのつゝかばあゝあゝ

○もろゝ 日本紀神武天皇歌おひの勢れまゝつゝも 茂登倍屢
云古事記やちもやへととりもまどくも四の書より里
の辞とうらねをこゝれをたゞきあ格なり

○もろゝ 字鏡に餉寄食也毛良比波死せりえたり

○やろゝ 續日本後紀長哥にうゝまゝす 博士不雇須とあり

○ゆろゝ 源氏紅葉如ふこゝ後ゆるびるまきやろゝ

○よろゝ 万葉一にこゝれと与呂布とあり

○よろゝ 源氏夕敷ようらよ後ほひせり

○古くはつぎきをちぎわひ けがをにぐへまをーん

まをまひまゝくあををまゝーもまへまらまをまゝひゑ
とゑまひわとまををめをまゝへむひわをたをわたら
のまをのへちと延てつるまやなふいせまやーとの
中にこの四ほよもつたたるをむかひもせもよきてつぎ
まをたを某詞をのべたるむもくもーのぬき海なれを多
しまゝ二重ふれ登くつゝもしつゝ古事記中巻にまひ
まをほうふーでみ乃まゝとあかちとまほをまゝあはと
つひまゝそれとのべてやくつひ日本紀雄略巻に中津枝
ちらうゝまゝ万葉二下つ歌よちのれうらぐへあどあゝ
まをまゝうへまのへゆとそれをぬゝまゝとつゝなりこの歌

○やちまゝと下

下は河麻行あくハ四段の活あねどもこの形ハうけやまは
こ乃活くまこるるりハ歎ふ不こりやあ

○いなぬる源氏末楠花ふつあびぬ口ころふま若菜
かてつあぶると又總角よえきこえつあびてなぞあはあ

○うまづ 祝詞ハ疎夫留ゆと疎備カあうこね麻
はくき四段のこしきなり

○うまづ 三代實録ハ憂ウレとあうけくこの句ハはよけ
り乃下二段の活ふのこ用ひたるを右乃こくつるハ四段の活
れ格る下はきここのかにもこきたるこせはえざればつ
ももたんにハ定らうとれと四段乃活わらバこきハ

うまづハうれとあうけくこの句ハはよけ
えどこの活あくハうまづハうまづハうまづハうまづハ
下ハハつてききさるあ後ぞこよかきはまり但ハあつて
あや二つに活く河の例四段乃活と中二段乃活又四段の活
下二段の活あつてハあまわれあわの中二段と下二段ハ
きてねあつてああハ例やハ此ハ四段の活ハあつた
こ下下につる事つらひききハ

○おろづる万葉九にこらびオラビ於良妣オラビ日本紀崇神表に叫オカ
哭又雄略表ハ呼コヒ喘ヒラをいけりあくおよこつてハ四段の
活きやハおろづる乃こつてハあつた

○やちまこ下

○こづる 字鏡に媚古夫 靈異記に媚こびと見く 古事記
上巻に媚附コヒツキテ云々ありこのやうに活きたるこゝをいへばこゝを
こけこゝにけこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへば
こゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへば

○まづる 万葉集にいふことつとを 強流志斐能我強語シラロシヒノガシラガタリ云々
まゝ云々四ノ人などまゝいふことあり

○まづる 和名抄に擧和名美々之比又音和名米之比古
事記にありこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへば
○まのづる 保代常本にたづねまゝいふことありまのづるまのづるまのづる
まのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづる

まのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづる
まのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづる
○まのづる 保代朝教にたづねまゝいふことありまのづるまのづるまのづるまのづる
りやくに四段の活イこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへばこゝをいへば
○たのづる 古事記上巻に建而訓建云万葉集十一にたのづるまのづるまのづる
多難備てカありまゝ日本紀雄略卷に叱とたのづるまのづるまのづるまのづる
たのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづるまのづる

下二段活	中二段活	一段の活	四段の活
責 <small>チル</small> 聚 <small>アツル</small>	試 <small>コト</small> 恨 <small>ウラハ</small>	見 <small>ミル</small>	讀 <small>ヨム</small> 住 <small>スム</small>
(め)	(み)	(み)	(ま)
キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル
キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル
(む)	(む)	(み)	(む)
キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル
(む)	(む)	(み)	(め)
キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル	キムル アツル

○ヤチキキト

○二十四

麻行之圖

並受るてゝよきみ

〇万葉十又よたきしハ麻布禮押狭衣
 〇二二ぬのきををわのくふかへつ 枕草紙よきろき多紙のむ
 〇まぶなるうんよひまわつたるまみれあふハかよふてのむ
 〇れハあはれ活こゝ感よけりぞよきハたきぬまへハかみ
 〇延てつむむまむハむまむれをばむりくつるなりけふのよ
 〇下二段の活の事よき

○つむ 万葉二に敵見有とありは此とてきたる

鬼えぞれどもこれ活あぐべ中二段のくまきまハワド

○いそ 日本紀神武卷屯聚居之屯聚居此云 怡皮滋萎又欽明卷

に充満あり

○うだろ 續日本紀宣命と天地乃宇倍奈由流之弥

也あるはありこ乃たれあり

○うれろ 伊勢抄が案にワグセーガゼヤうれろ

みせやろまこれとふむ

○かむ 和名抄一様俗云波奈加無 保氏あげま

たな志をくうら

○かろ 伊勢抄のふかみろま 大和もはろ

はかろ 是はふろ

○かた 靈異記と可陀弥 日本紀と續日本紀

宣命に好とろ

○かろ 續日本紀宣命に厚弥

○まろ 好忠集のわろま 松乃密紙中

○くろ 狭衣にろ

○ろろ 古今集のろろ

まの保氏もはろ

中二段の活詞

おのむるを俗言ちみるゝつぬり

○おのむる ○うちらむる ○うせむる ○しむる

くせむる たむる

○あむる 古今集よけく人ゆあむるしき枕草書よ
社かきくつむるゆハまくなを程あり

○うせむる 狭衣ようせむる人なつてせよりけむる

うらむるといふをむら

○うせむる 源氏中川よきことえうせむることありさくこの

初めの四段よ波りの中二段せをこくききてえむるや

○たむる 万葉云よき多武流うれむとくむと二十に

をうれまに伊勢牟流。こたなむあうたのやうたむるたむる
たむるたむるたむるたむるたむるたむるたむるたむる
れむるれむるれむるれむるれむるれむるれむるれむる
かむるかむるかむるかむるかむるかむるかむるかむる

下二段の活詞

此むるを俗言ちむるこつぬり

あむる あむる あきしむる あたむる

あむる あむる あやむる あしたむる

いけむる つらむる うせむる うげむる

えしむる ねむる かむる かしむる

○やちまき下

○こゆる 万葉五ようり許伊^ヨうしてなご抄あり外にこゆる

こゆるこゆるなやほこたる事こゆるをほこせどもかへんこゆる

中二題 詞の例あり又こゆるこゆるこゆるとほきて阿^アりゆてそる

こゆるをまされとこゆるこゆるをまされよりかの新ようり

てそてけがりのけ詞なることりきしけ

下二題 〇むゆる うつは物ぢう後進にむゆるあり

下二段の活詞

けゆると借ちなるるこゆる例あり

あゆる

あゆる

あゆる

あゆる

いゆる

いゆる

いゆる

いゆる

おほほゆる

おほゆる

おほゆる

おほゆる

こゆる

こゆる

こゆる

こゆる

まぬゆる

まぬゆる

まぬゆる

まぬゆる

えゆる

えゆる

えゆる

えゆる

みゆる

みゆる

みゆる

みゆる

○あゆる うつは物ぢう繁茂びくきに松何とてうら思
てまゆるふうまされたる子のあゆるはよき辞ゆへに松何と
あゆるやまゆる君うまゆるをまゆるの野かまゆるさく後撰
集よまみう代はゆるれはゆるにあゆるさくね全集集連
寺よならあゆるとらゆるうらまゆるあゆる

○あゆむ 万葉八上 聖の如く 三月をちかむ 安要奴が花咲
 しまり云々 十に秋は方き 水草花の 安要奴が
 又十八上 安由流實ハ ぬきけく ぬきけく ぬきけく
 ○あゆむ 打ちつばよ 血のゆを 枕草紙に ありせし
 於て ぬきけく ぬきけく ぬきけく

○あゆむ 源氏中 けしき 寄生 小つたえ
 伊予 榮花 物たり ぼあり ぬきけく ぬきけく ぬきけく 外
 活き ぬきけく ぬきけく ぬきけく 波 下 二 段 乃 活 け ぬきけく
 俗云 あり ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく
 ○いづゆる 和名抄 一 嘶 和名 以 波 由 源 氏 旅 角 馬 どの

いづゆる 波拾送集に 駒をいづゆる ちやれちやれ 一のこ
 をちかむ せふいづゆるいづゆるいづゆるいづゆる 波 乃 四 段 の ぬきけく
 ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく

○おびゆる 万葉集 二 協流 ます 源氏物語 一 筆本
 やや おびゆる 若菜に ねびえ ぬきけく ぬきけく ぬきけく

○くゆる 万葉十四 一 みる 伊波 又 戯 乃 君 久 由 三
 志あゆむ 万葉 二 友 ちか ね ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく
 之 奈 要 一 づ れ ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく

たつき 志あゆむ 乃 あり ぬきけく ぬきけく ぬきけく ぬきけく
 ○いづゆる 字鏡 一 瘡 豆 比 由 ぬきけく

○ちやれちやれ

○ろゆる 万葉ニよかりれば波由流とよみたり

○ひゆる 拾遺集に夕とひるよきかきあり

○ほゆる 靈異記に喚吠と保由と訓はらる

○りゆる 出雲国造神賀詞に御若敷坐忠岑集に
 ころの志げくをわゆるゆるし忠見集に人のちゆる菊
 のうに赤湯あ家集に霞よとゆるちぞゆる

○とゆる 古事記中巻に御軍皆遠延而日本紀に瘁瘡
 ぬの字を去るよりけりゆるきさるこゆるけれは阿
 りゆるとゆる日本紀にやとゆるけは
 りゆるとゆる

羅行之圖 並受るるにそのあ

下二段活	中二段活	四段活
晴 <small>ハル</small> 枯 <small>カ</small>	蓄 <small>ホ</small> 下 <small>カ</small>	釣 <small>ツル</small> 去 <small>サル</small>
れ	り	ら
きむねとでぞ	きむねとでぞ	きむねとでぞ
る	る	り
る	る	る
る	る	る
る	る	る
る	る	る
る	る	る

○けりよハ一戻の活河なり

○きりよハ一戻の活河なり

ありこのころききゆあり

○アチケルヲ 日本紀舒明卷に入畝傍山因以探山欽明卷
小考カカヲテ 竅古今又字鏡小竅阿奈久苗榮花物語うらの
別は字カや能にやあとのものごとよるひはけつるゑんと
かたはたどていやうとくありせうはねをあらうやうひ
けつるゑとゆいぬあり

○あづる 字鏡に焚阿夫苗後撰集あつる衣けつる

○あやうれ 拾遺集あやうれをるる手とてあり

○いほる 万葉十の伊射流火波とあり

○いほがれ 万葉九の伊都我里とせぎやあり

○うごむる 大被詞に集侍續日本紀に末為字古那波カハレ 苗

○うごゆる 古事記下巻に庭むら字受須麻理カキ 草とあり

○うぬる 日本紀允恭卷に蕃息仁賢卷に殖皇極卷に

不蕃息バカマハラ たりあり

○おごれる 字鏡に賒於文乃利去依日記におぎのちぢ

としておぢあり

○おくる 源氏若世におくるりる栲娘おくるりる

○おくる 續日本紀宣命に懼理オッ とありけてこの河内

昔よりハ下二辰の活きよけつるを古くハかく四辰乃活に
そよひく此例カクリ 隠觸志カスリ たりあり

○おきよのやちまて下

○ 杉をぬきしう うれは後落ふ文れ杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう
 ○ 杉をぬきしう 万葉十六のうらた本ふたひ 於保登禮流や
 あり又保氏東をよ杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう
 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう
 二匠の削りくくくき異なり 平習巻あをかくあり

○ 杉をぬきしう 日本紀神武卷の倭姫を杉をぬきしう 杉をぬきしう
 ○ かくる 古事記上卷哥に喜山の日か迦久良波下巻の
 かくる賀久理 万葉十めにやどり我久里なる杉ありい
 上よりへくくく 中昔よりいふ下二匠のくくく杉ありい
 ○ かくる 古事記下巻にゆふ日賀氣流美夜云杉あり

あをぬきしう 新古今集夏子野もせ乃くく杉ありい
 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう 杉をぬきしう
 ○ かなご 源氏筆本にひきかかふる杉ありい
 ○ くらり 宇鏡に饑伊比久佐礼利をぬきしう
 ○ くらり 古今集序よきみな杉ありい 一財をくく杉ありい
 まて精舎日記ふきくく杉ありい 杉ありい
 ○ くらり 牛取も杉ありい 杉ありい 杉ありい
 ○ くらり 棠花抄の月宴に世あが杉ありい 杉ありい
 ○ くらり 古事記中巻歌よあが杉ありい 許夜流許夜理母
 とより又古今集よ杉ありい 杉ありい 杉ありい 杉ありい

うらほりくぬるとりう年あけうー

○ けくどろ 杉うらほ物がうら又使夜四うきありさあり

○ あぶまた 榮花物語玉飾しつが命やあゆらうら

○ 志なる うらや藤系君よ大きからあよ志うらうら

○ 志ゆ 古事記下巻哥にやよ士麻理斯麻理もやゆら

○ 志なる 伊勢物語よ女をうらやせうらにうらて志なり

○ まる 源氏をうら女よ淡きやうらやつひき

○ 志なる うらや物語吹上下よらうらうらなる上よ

○ 志なる 源氏桐壺ようらうらうらうらうらうらうら

よ鼻も。う。何へりなやあり又万葉五よゆ酒うら須々呂

比豆ともなり須々呂比ちををなり

○ 志なる 拾遺集意よまなまど 堀川百首夏よまなま

る中やにうらゆる云々 同二郎百首にまなまらぬらうら

堀川百首初句を一本にまなまらうらうらうらうら

まなまらうら

○ 志なる 宇治拾遺物語よ菊のびあがをゆらうら

ぢりもぢりもあひらをゆらうら一庭をうら

○ せまる うらや友原君よせまらあれたる大雲か

○ 志なる 万葉集十七あ月曾々理うらうら山神樂哥よ

ゆきりあきまよ曾々利あぢよなどりてり

○そくろ 杉ちくぼ拙清よりりてりひそくろて轉珍日記
七よんをいぬきむなむのひてりてりおたろむよ栄花拙清
楚王夢にそくろいせなてま修りきあむり

○たろろる 万葉一よ置有 杜若余に髪乃うちたあり
て狭衣四よたろろりわくあむり

○はくしれ 字鏡に醋左加奈豆志苗ときえり まま
源氏集本よはくしれいふ又万葉集五よわくしれを取都々
之呂比とも延てり

○はくしれ 字鏡に膳孕始兆也豆波利乃登支和名抄り

擇食ハ豆波利杉ちくぼ拙清よりりてりひそくろて轉珍日記
栄れよろろりてりひそくろりてりひそくろりてり

○なづきろ 神乎奇に見てりてりてりてりてり
神乃てりてりてりてりてりてりてりてり
よハ結句とるつてりてりてりてりてり

○ちぬる 万葉十五に人奈夫理のてりてりてりてり
○小ちる 字鏡に踏不弥余志苗や見ろり
○小づる 日本紀天智巻に鋭鈍力竭とあり

○はくろ 字鏡に膳祢夫苗とあり
○のをろ 日本紀齊明巻よ病自蠲消とあり

○なるる 万葉二十に波奈利蕪乃ををなれて中あり
かく四原ををたしくと見えたるのこも中昔よりいこの下
二原のなたるまにのこりり

○なびくれ 日本紀頭宗巻に被をなびくらまほ
やこりりまきよあり

○ひれ 和名抄に痢久曾比理乃夜万比又放屁倍比流

○いたけ 拾遺集に松乃海にいたまをなれをを被衣
三よ白ののほくせくひれる松乃ぬみやをなれま松川
百そ夏よりだま八日扱をををわけるのえは乃岩を
いたくまきなれあり

- ふた 万葉二十に布理古事記下巻にふたをなや
よくま布禮なありけくかくそのむきひよまそそ又
ふたれまそまの拾うらなれ中昔よりは十二原の作
にのこ用いを十二原の作まへハその結ひまのまそそ
がなまらなまこのまらえゆひをそそそ考へ辨之べ
○なれ 万葉十五に山川をなつに敵奈利氏なれなれり
○ほとれ 采菽物語花山ほとれまそそまあるハハ活まそ
○ほごる 日本紀頭宗巻に被をほごるまそそまあり
○ほびる 万葉十八に雲保妣許里まあり
○ほ 古事記上巻に屎麻理ちりまき万葉十六に屎遠麻

○やちま

礼中取捨は、[○]はをくく[○]た乃[○]まり[○]むらぬ[○]の[○]を[○]え

○まゝに 枕草紙に袖かへま[○]る[○]を[○]あ[○]り

○まなづの 古事記上巻になき麻那賀理[○]とあり

○むつる 万葉二十に敝牟加流[○]の[○]種[○]あり

○もぢる 宇治拾遺物語よむ[○]あ[○]る[○]を[○]あ[○]ゆ[○]く[○]ま[○]る[○]を[○]き

かぎらまぢる[○]を[○]ま[○]る[○]を[○]あ[○]り

○やまゆゆ 続日本紀宣年中息安麻流倍伎又休息安[○]麻利[○]

○ゆも 住吉物語に古き[○]ゆ[○]を[○]た[○]る[○]と[○]り

○ゆも 神樂寺に由須利[○]の[○]方[○]よ[○]と[○]を[○]り[○]方[○]よ[○]と[○]あり

○よけ 源氏物語よけ[○]の[○]方[○]よ[○]と[○]を[○]り[○]方[○]よ[○]と[○]あり

○ワも 日本紀神代哥にむき[○]の[○]鳥[○]を[○]け[○]く[○]鳴[○]よ[○]り[○]お

和素[○]暹[○]瑪[○]と[○]れ[○]と[○]る[○]を[○]万葉二十に和須良[○]

牟[○]磁[○]な[○]り[○]け[○]く[○]オ[○]の[○]音[○]ら[○]と[○]を[○]む[○]の[○]て[○]と[○]ハ

を[○]受[○]る[○]ハ[○]果[○]乃[○]こ[○]も[○]四[○]段[○]の[○]こ[○]も[○]は[○]か[○]ぎ[○]れ[○]と[○]の[○]河[○]も[○]中

昔[○]より[○]下[○]二[○]段[○]の[○]活[○]に[○]の[○]こ[○]も[○]古[○]事[○]記[○]ハ[○]妹[○]ハ[○]ら[○]と[○]れ[○]世

の[○]こ[○]も[○]こ[○]も[○]あ[○]り[○]て[○]ハ[○]下[○]二[○]段[○]の[○]活[○]なり

○ワも 枕草紙にむ[○]の[○]を[○]ま[○]る[○]を[○]あ[○]り

○と[○]る[○] 日本紀に誘[○]聚[○]保[○]氏[○]若[○]菜[○]に[○]と[○]る[○]を[○]あ[○]り

乃[○]ん[○]よ[○]く[○]漢[○]中[○]納[○]言[○]抄[○]に[○]を[○]こ[○]り[○]と[○]る[○]を[○]あ[○]り

假[○]字[○]ハ[○]日[○]本[○]紀[○]に[○]む[○]の[○]を[○]あ[○]り[○]訓[○]な[○]れ[○]ら[○]に[○]あ[○]り

○あぢく 源氏物語常本にあぢく。可あく空掉巻に
あぢく。きこひなごけりり

○あぢく 字鏡に鱧魚肉爛也阿佐礼太利とあり

○あぢく 物語り文に社あぢきなり。りぬ乃ちあく外

あぢきたるやあぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

○あぢく 源氏末巻にあぢく。あぢく。あぢく。又手習に髪

乃ちあぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

○あぢく 万葉九に舟あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

○あぢく 和名抄に漆瘡和名宇流之加不礼とあり

○あぢく 神樂奇に山人のあぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

○あぢく 散木寄歌集にあぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。あぢく。

平海かりかきを語、こゝ成りや外より来りて

○まみあうれ、詞苑集意より、のよのよをききあうれ

とあり速に炭焼を抄りたり

○まゆ、ま本集鷹乃奇よ、それぬき反とよあり

○まぼろ、袂衣一より、ひきほりけをひきありま

今撰和奇集に為真入道、いよの梅のちのち

ぢうれ春雨と、ほきてをわくともやあり

○たの、古事記上巻に宇士多加礼、ゆゑに俗云

てと四段のそと、き河より

○たの、古事記上巻に血爛をちあ、えたり

○まゆ、係公夕秋より、うれぬがよあり

○まみ、日本紀神代巻に血染と、まにわたり

まに千載集よ、まにわたり

○まゆ、丹後守為忠家百、まに盛つて

まにまゆ、まにわたり

○まゆ、神樂奇に油と、まにわたり

○まゆ、お唐書に、まにわたり

まにまゆ、まにわたり

よううのうれちで活きたるものなりとされどもこの活きたる
なうきとれとひきまうのれひきとまぶなる河をひよひまへ
里ひきまうのいけ河よひひらふ事とそるくつるあり
○此さうれ日本紀崇神卷に急居此云菟岐于とありお
つら文よはいぬふなとつるくく多しむあつ河あり

下二段の活詞

○うれ 字鏡ニ饑伊比余字々とありれうゑとつる多し

飢いほ
いほ

植いほ

蹴うほ

居せうほ

○うれ 伊勢物語にワとれ草う。やなよきおあつ八段後
○くろく 古事記上巻に蹶散又蹶離名ハラカシ日本紀に蹶散此云
俱穢躡邏々箇須ふあつとておあつ蹴鞠世間云末利古由
とありむあつ河ちつとやつてハ也 けの下二段のまじり
て候字をなうくわらもやく誤つておあつや

○まう 神皇正統記に大内山乃まらにま今人な
くまの図をまうまとありまを急やつてハ多し
○ひらく 古事記中巻にまま斐惠涅とありまの河外は活
きたるま物と見えまらまを才四の音より祿とくくハ下二段の
活のまはりかを和名抄に竹力阿乎比衣とつるち事ハひや

○やちまうく下

○五十三終

つとめぬうけりたるを頼もすれに能く家持ちあひたるはよ
しめりや

安^レ行^ルもをりて右よ奉^ルるあやめびとれをゆ^クよたるきく
かぎ架^テくむがゆをたむれぬにま^テあひくものしるなま^バ
もれたる頼^多めれ^テ一^トはら^レよな^レひてしる信^き那^ま

文化三年春三月

あや葉乃またなほふとくしる。秋よせ
あし。又かよき。しよ書見取した。
方かくあほとむく。志うし。母はく。
志うし。母の葉にや。よくし。あえた
は人のまがよるな。しるあはる。ま
れな。むほり。しるあ。或いし。

○やちまうた

101

だひろくそみ〜ぬ人乃何んものこ
よみの傳。かまほやねもさよあ
たりてもねひままどひ。又ハ何んぬく
もえひんかひいさ。しう入うまもさ。さく
春庭。のひま勢かひまよ。いんまの携り
書。毎人〜のまひまのさ。いんまのつらごよ。

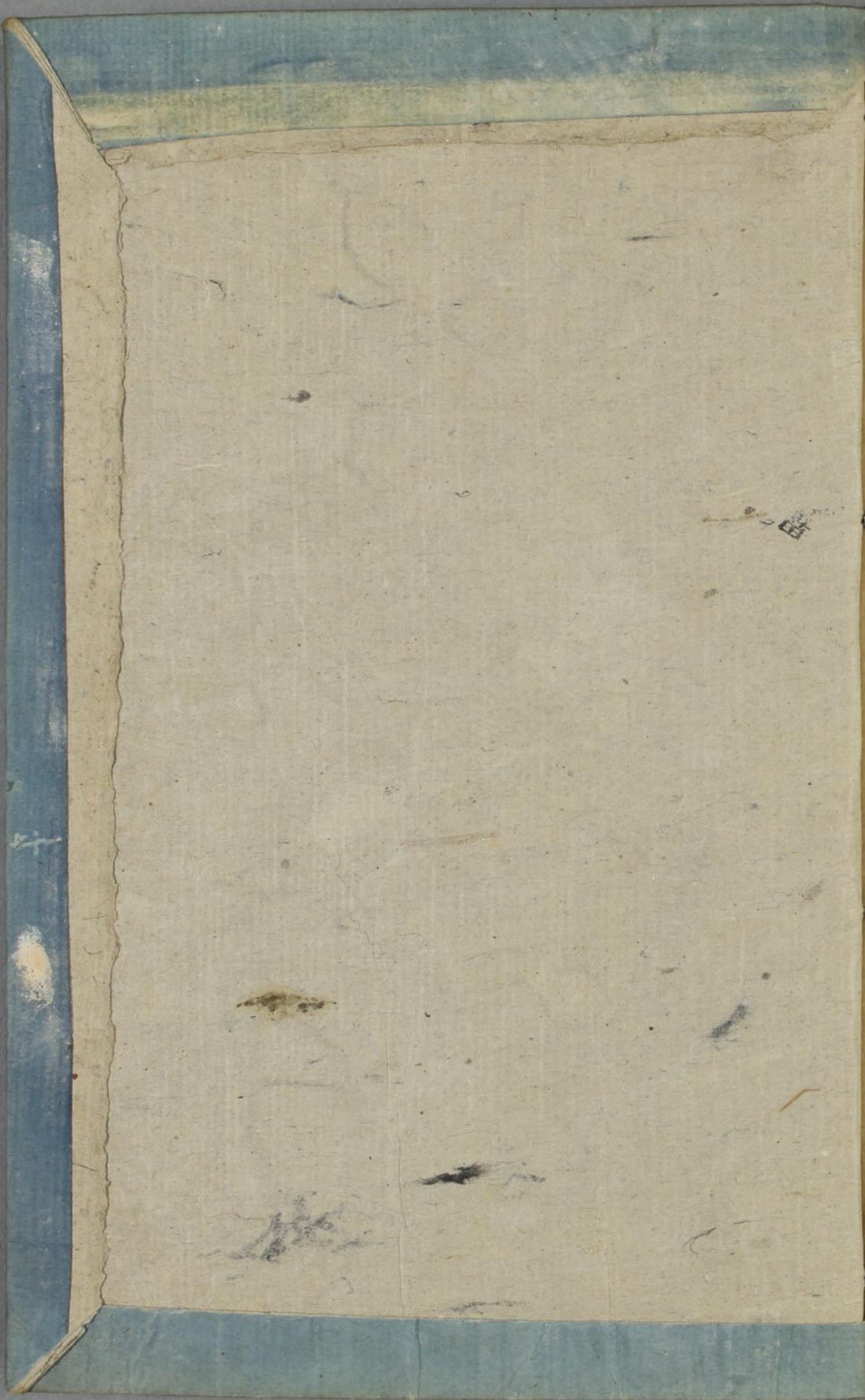
いんまそさるるを。引いんまの詞よ。ほみ
りそまぶたさるる。ねま〜考入。平〜さ
まのまひま。さるる。ねま〜さるる
なまね。ねひんま。さく。かひの音よ。さく。さく
人乃。まもさ。ほま。つら。さるる。ま
たさあり。ねひま。まもさ。さく。かひ。ま。入。ま。

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a short passage, located in the upper right section of the page.

南唐大平

Handwritten text in a cursive script, located in the lower right section of the page, possibly a continuation of the text above or a separate entry.

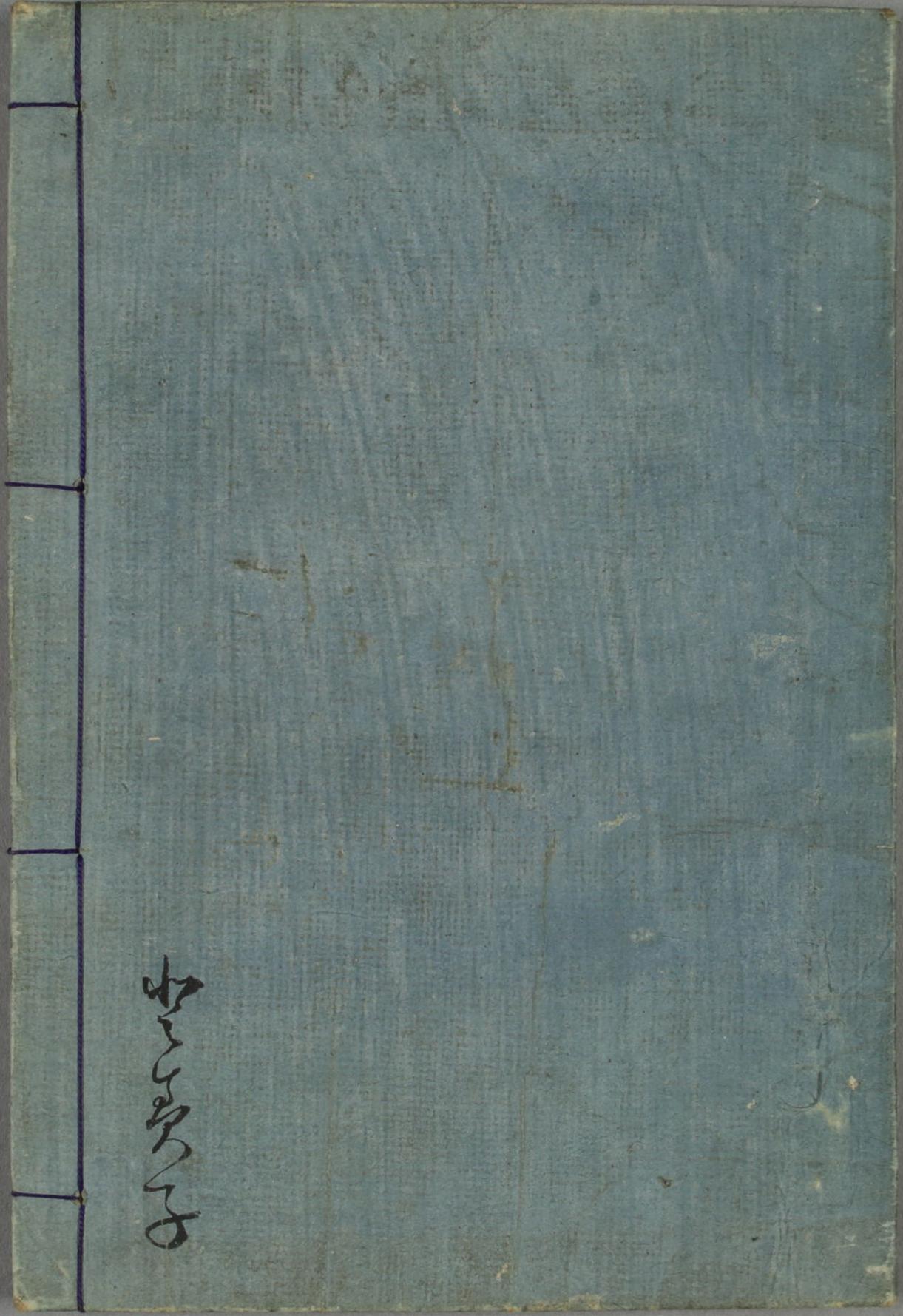
Small handwritten mark or signature at the bottom left of the page.



Handwritten text in vertical columns, likely in Japanese or Chinese characters, enclosed within a faint rectangular border. The text is written in a cursive style. The rightmost column contains the most legible characters, which appear to be a title or a chapter heading. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper.

中居大平

一



中
心
書
庫